

# 文化高知

'97年5月 NO.77



「布師田」片木太郎

# 大学間の単位互換制度に寄せて

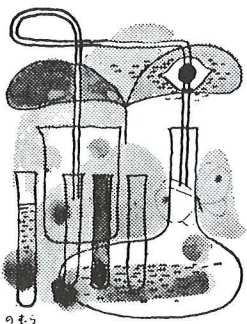
越田 豊

高知工科大学が第一期生を迎えた入学式の日の午後、高知大学・高知医科大学・高知工科大学の五大学間の単位互換協定が締結された。単位互換協定は締結大学相互の学生にとって、自大学では修得しがい分野の専門講義を聴講できるということが第一に印象づけられ、専ら学生のためだけに役立つ制度として受けとられがちである。しかし、この制度への参加は教員にとっても、非常勤講師として他大学へ出講することに較べて得るところが多い。それは複数の大学の学生を同じ教室または実験室で教えることで教員の受ける刺激が違ふことによると言えよう。五大学の単位互換協定が実際に適用されるのはこれからであるが、私は以前、国立大学理学部の附属臨海・臨湖実験

所長会議によって発議・実施されることになった単位互換の臨海・臨湖実習に約十年間、参画した。公開臨海・臨湖実習と称するこの単位互換実習は、北は北海道大学の厚岸から南は琉球大学の瀬底に至る各大学の臨海・臨湖実験所で、それぞれの特色を活かした実習を計画して各大学から聴講学生を募集し、実習計画にふさわしい講師を各大学から招いて自大学の教員と協同して指導にあたる。私は当時大阪大学に所属していたが、島根大学の隠岐と岡山大学の牛窓での公開臨海実習に出講した。聴講学生と指導教員がともに複数の大学から参集し、同じ宿舎に四泊ないし五泊して朝の九時から夜の十時ごろまで集中しての勉学である。指導される側もする側も成果が身につかぬはずがない。いつしか

指導教員たちの間で「公開実習荒らし」という言葉が聞かれるようになった。これは例えば三年生の夏に隠岐と厚岸、四年生の夏に高知大学の宇佐などのように、全国を股にかけて各大学の公開実習を次々に聴講してまわる学生への畏敬と揶揄を込めた呼び名である。もとよりこれらの諸君は互換単位を多く取得するのが第一の目的ではない。諸大学から参集した同学の聴講学生と専門教員による実習が、一大学での学生と教員だけのそれに較べて一味違い、さらに各地でそれぞれ独特の生物相に接することのできるものが魅力なのであった。「公開実習荒らし」のなかから多くの専門家が育ち、それぞれに活躍している。

一方、私も公開実習に出講したお



977

蔭を得た。私はこの実習でそれまで実際に取りあつたことのない二胚虫を実験材料とした。この動物はタコやイカのなかまの腎臓に寄生して生活し、細胞総数が約四十個という最も細胞数の少ない多細胞動物である。しかし、無性生殖によって生じる胚と有性生殖によって生じる胚との二種類が区別され、それらの胚はいずれも一個の特別な細胞内入れ子のようになって生じる。このような発生の様式は他の多細胞動物では決して見られない。わが国のタコやイカのなかまからは三種ほどしか二胚虫が知られておらず、また、胚の発生については世界でもあまり詳しくは研究されていなかった。公開実習で二胚虫を取りあつていているうちに、文献には見られぬ二胚虫が見つかり、本気でこの動物を調べなくてはと思うようになった。その頃、「公開実習荒らし」の一人だといえるF君が大阪大学の大学院に入学し、今は教授のT博士とともに私たちは二胚虫の研究を始めた。F君の努力によって二新種を発見し、二胚虫の胚発生における細胞系譜をはじめ明らかにできた。学位を得たF君は今、アメリカのサンタ・バーバラでさらに二胚虫の研究を続けている。

（こしだゆたか・高知工科大学副学長・大阪大学名誉教授）

昔の教え子が、幼い女兒を伴つて来訪した。手に余るほどの山吹の枝を土産に、何年ぶりの邂逅だったろうか。連れの女兒は、義理の娘の子で、「ばあちゃん」と呼んで付きまとうと言う。生さぬ仲の、しかも思春期の子のいる結婚生活に、立ちなずみ生きあぐねた彼女の日々を知っている私は、ここまで来たのかと、彼女の歩み

を思う。今どき、四十一歳のおばあちゃんには、若すぎて少々可哀想だが、情濃く聡明にここまで辿り着いたのだ、と改めて思った。そう言えば、目許の鮮やかな、とりわけ笑顔の愛らしかった十八歳の娘は、柔らかにほどけた中年の女の美しさを匂わせ始めている。この人、玉鬘みたいだ、と私に思わせたのは、土産の山吹のせいだったか、ふと透かし見た彼女の生の軌跡の故だったか。私は確かに、今様の玉鬘をそこに見たのだった。

玉鬘は源氏物語の女君の一人だが、鄙育ちのすこやかな美女である。明るく闊達で、一つ一つ苦境を越えていく聡明さが鼻につかない。野の香りを都ぶりで見事にアレンジして、今めかしく華やかで

もある。

頭中将と夕顔との娘だから、貴顕の隠し子という立場だが、玉鬘の生涯は、心休まらぬ流浪の中で

## 「山吹」の人

藤田加代



危機を乗り越え、自らの「場」を選び取る苦勞の連続だった。肥後の豪族大夫の監の強引な求婚・「六条院の花」に仕立てて遊びの

れを取ってみても、一つ誤れば貴族の女としての息の根を断たれる難しい状況を、玉鬘はしなやかな生命力とバランス感覚で、「らう

らうじく」「らうたく」「うつくしく」「めやすく」生きた。

源氏物語の作者は、この玉鬘を山吹の花に擬する。山野や川辺の花から貴族の庭園に移し植えられた山吹、高雅ではないが匂いたつ華麗な黄花の山吹、ほろほろと散る風情を見せながら強靱に根を伸ばす山吹に、六条院世界に見事に生き延びた、郡育ちの玉鬘を重ねたのであろう。

\*

孫と手をつないで帰る教え子を駐車場まで見送って、私は山吹を大きな壺に生けた。昨今、花東の土産は珍しくないが、「木草の花」をそのまま切り取って来る人はさすがに少ない。夫と日曜市で買った山吹の苗木が、刈っても刈っても伸びて、もう二人で両手を広げても抱え切れない茂みになっている、と彼女は笑っていた。

山吹は、箱のような集合住宅のわが家で、黄色の光を集めて、三日四日咲き続けた。教え子のつまましい喜びのように見えて、独り者の私には、その花が、ちよっと眩しかった。

（ふじたかよ・高知女子大 学保育短期大学教授）

# 第七回高知出版学術賞の 審査を担当して

中内光昭

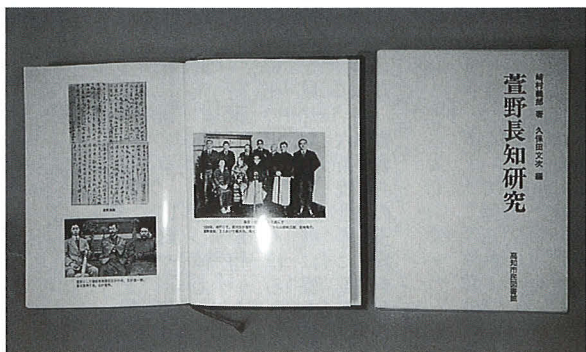


第7回高知出版学術賞の応募(推薦)作品

第一回の高知出版学術賞の審査が行われてから満六年、その間に、その重点を「学術」におき、他の出版関係の賞とはひと味違うステイタスを目指した本賞の意図は徐々に関係方面に浸透し、毎年本賞にふさわしい作品が相当数集まるようになってきた。

本年の応募は二十五点で、例年のことながら、人文、社会科学関係の図書が多く、自然科学関係は数点に過ぎなかった。

本年度の審査は、今井嘉彦、内川清輔、瀬戸勝男、西島芳子、西野勉、吉竹博の各氏に私を加えた七名が担当し、次の三点が選ばれた。



崎村義郎著・久保田文次編『菅野長知研究』(高知市民図書館刊)

崎村義郎著・久保田文次編  
『菅野長知研究』  
(高知市民図書館刊)

菅野長知は高知市出身の「大陸浪人」で、清朝の庄政にあえぐ中国民衆の解放のため、宮崎滔天らと共に孫文の片腕として活躍した人物である。「馬賊」を率いて大陸を駆ける一方、孫文の日本亡命にも大きな役割を演じた。さらに「満州事変」や「支那事変」の早期収拾を計るため、日本政府の密使としても活躍した。戦後は貴族院議員になった人物である。

りながら、地元の本県で「菅野長知」の名前を知る人は少ない。彼の活動の性格から、彼に関する資料は大変限定され、伝記もつくられていなかった。

故崎村義郎氏は中国史の専門家である久保田文次氏の教示を受けながらも、独力で埋もれた資料を集め膨大な伝記を書きあげた。今回のものは、久保田氏が故人の原稿を整理し、解説や年譜を加えたものである。

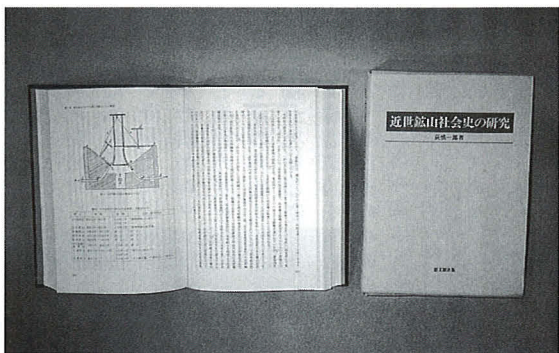
本書は、スケールが大きく、必要領院徒奔徒勞居士」とも称された菅野長知の波乱に富んだ人生を、活写している。また、彼の活動の原点でもあり、目標でもあった、中国民衆の解放運動の展開についても、適時解説されており、大変読みごたえがある。独創性高く、今後、あらたな研究に道を開く業績として、高く評価された。

荻慎一郎著

『近世鉱山社会史の研究』

(思文閣出版刊)

本書は、東北地域の鉱山(金、銅山)では秋田藩領、鉄山では南部藩領のもの)を対象に、近世における幕藩領主による支配や経営、発掘技術、労働者の生活、組織、闘争などを、社会史的に記述、考察したものである。



荻慎一郎著『近世鉱山社会史の研究』(思文閣出版刊)

ある。

封建社会において、鉱山は一種の治外法権的な「離島」を形成していたと考えられることもあるが、著者は鉱山と言えども、基本的には公権力の支配を受け、仕事や地域の特殊性に基づく、限られた自治を享受していたのではないかと、この疑問を出発点に、多くの第一次資料を駆使して、支配や経営の実態に新しい角度から光を当てている。秋田藩の主要金山であった大葛金山の研究、さらには、発掘技術や労働者の組織的抵抗に関する研究などには、新しい知見や見解が見られ、独創性に富む研究である。研究が実証的で、叙述も

論理的、文章が明解である点も高く評価された。

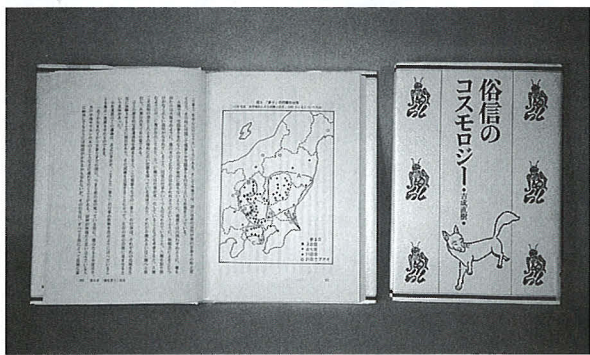
なお、本書は著者が本県在住であることにより受賞対象とされた。

吉成直樹著

『俗信のコスモロジー』

(白水社刊)

俗信の多くは世にいう「迷信」であり、従来の民俗学では、単なる枚挙的収集の対象か、せいぜい、民族のルーツを推定する手段としての位置付けしか与えられていなかった。本書は、調査した南四国の俗信の背



吉成直樹著『俗信のコスモロジー』(白水社刊)

後にある世界観を想定し、その視点から、広く東アジアの俗信を眺めることにより、俗信を生み出した「深層構造」に迫ることができ、これを示した、極めてユニークな著作として評価された。

一例を挙げれば、従来、漁にまつわり、女性、出産、死、などがうとまれ、その原因はそれらの穢れがあるとされてきたが、筆者は沖の島の漁民の俗信の調査を通じ、これらの俗信を、漁民の持つ世界観と結びつけて説明している。それは、魚は海(あの世)のリユウゴンサマの恵みでこの世にもたらされたものであり、出産も同じくあの世からこの世への富の移動で、死はその逆である、という考えであり、多くの事象をこの世と他界との富の交換と考えることにより、俗信の意味が理解できるといふ。

今回は、入選作品以外にも数点の特に優れた著作があったが、いくつかの観点での評価の結果、全会一致で先の三点が選出された。本県において、また、本県を巡って、多くの人々により、多様な学術活動が展開されていることを改めて実感した今回の審査であった。

(なかうちみつあき・高知出版学術賞審査委員長・前高知大学長)

# 世界にオンリーワン

山田裕司

〈4〉

久しぶりの上京だった。僕の乗った飛行機が、右に大きくターンして白い雲の中を降りて行く。やがて雲の切れ目から、もう一枚うす汚れたスモッグをまとった東京湾が見えて来る。

「今日の機長は上手だったな」。独り言をつぶやきながら空港ゲートを抜け、モノレール・山手線・常盤線を乗り継ぎ、筑波研究学園都市へと向かう。三年前からスタートした小石丸の研究の方法の正否を確かめるため、そしてもう一つ、品質をさらにワンランクアップさせるための品種改良のヒントを得るために……。

最寄りの駅からタクシーで一〇分程走ると車窓の景色が変わる。整然と延びる道の両側に、広大な敷地を持つ施設が次々と姿を現す。しばらくその異様に目を奪われる。いつの間にか、車はその中の一つへ呑み込まれていく。「農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所」——日本の蚕研究の総本山である。

お訪ねしたのは、遺伝育種素材化研究室の永易健一さん。永易さんは

想を求めて来たのではないのでしょうか？ その世の中の大きな流れの中で、もともと小さいまゆに属する小石丸などは、最初の段階ではじかれてしまったのではないかと想像されます。また、蚕の品種だけでなく、まゆから糸を採る製糸方法も、染織方法も、昔とは全く違ってきます。ですからその意味では、もし現代に小石丸に代表される日本の原種を復活させたとしても、大量生産型の今の技術では、それが活かされるとは思えません。その優れた特質を活かすための新しい技術の開発を、同時に行わなければなりません。

二十一世紀は、

メタルカラーからグリーンカラーに変わる時代だと言われています。金属的な冷たいものから、緑色に代表



高知県農業技術センター山間試験場にて服部さん(左)と私

しい段階に入っています。今年度から県の試験場(大豊町にある山間試験場)でも、研究課題にして下さったので、さらに積極的な取り組みが服部さんと出来るものと思っています。この三年間の取り組みで、もう七十年以上も前に姿を消していた小石丸が、実は現代の品種より品質の面では優れていることが、証明されたのではないかと考えています。でも、なぜ時代が進んだのに、逆に品質は向上しなかったのでしょうか。一言でいえば、二十世紀は質より量の時代だったということでしょうか。約百年前に始まった日本の産業革命は、世の中すべてに大量生産型の発



明治期から現在にかけて飼育されてきた品種・次第に大きくなっている。(農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所にて写)

ご多忙にもかかわらず、半日僕に付き合ってくれました。お陰で、暗模索だった蚕の事で、今まで自分がいだいていた様々な疑問が解け、一本筋が通った気がします。また、今僕たちが研究飼育している小石丸が、他の小石丸より品質が良い一番の理由は、永易さんが改良した品種だったからだ、ということも分かりました。実は、僕が今回一番期待していたのは、〃国の持つている日本の原

されるもつと人間的な温かいものへ——ということだと思えます。それは、同時に、大量生産型の思考の中で失われてきた物をもう一度見直すこと。物作りがあまりに人間の手から離れたためにいつの間にか見失ってしまった大切な物を取り戻すことではないでしょうか。

僕はなぜこの高知の空の下で、一人染織をしているのか？ なぜそんなにこだわって仕事をするのか？ 自問する時があります。でも答えは出ているんです。「世の中で、自分にしか出来ない事をやる！」、一言でいうとそういうことです。でも、何もしなければならぬ事ではないんです。実際は、ただ自分のやりたい事をやっている、それだけなんです。

「物作り」とは面白いもので、同じ素材、同じ技法で、同時に複数の人が何かを作ったとしても、出来る物は、一人ひとり違うんです。なぜなら、みんな最初からそれぞれ作りたい物が違うからなんです。別の言い方をすれば、作りたい物がなかったら物は作れないし、作りたいと思わないでしょう。何かを作りたい！ 大切なことは、その気持ちなんです。その思いなんです。その思いが強ければ強いほど、夢は実現する可能性が大きくなるのです。

もともと、みんなが持っている世界の中の自分だけの夢、まずは、その夢を見ることから始めてみたら、いかがでしょうか。

(やまだゆうじ・染織家)

# 語り継ぐ——(下)

## 堀内 豊

人生よろず指南の表札を、かけてよさそうな大野武夫さんの、含蓄のあることばを何度聞いたことやら。それは「価千金の時間」で、いまでも胸の底でキラキラ光っている。

「悪党とはまじわるべし。悪人は遠ざけるがよい」(大野武夫・「わが箴言」)

最後にもらったハガキは、「謹賀新年といいたいが、こちらは貧賀新年です。そちらの若ものたちは元気ですか。云々」と、ボールペンで走り書きしてあった。昭和四十六年(一九七二)一月八日付け。それから十日ほどして、吐血した大野武夫さんは、高知市民病

院にかつぎこまれた。胃癌の前ぶれだった。

「明朗快活に絶望せよ」(「わが箴言」)

いつであつたか、「堀内さん。こんどまた延寿本がでたね」と、橋詰延寿さんの出した小冊子をひやかしたあとで、「まあ、本を出すからには、立てて倒れんばあの本にせんといかんね」。しかし当人は悠然とかまえて、「反古を活字にしたら、寝覚めが悪くなる」と、一冊の本も出さずにあの世へ逝った。

没後五年の昭和五十一年(一九七五)十二月。

『無門塾 大野武夫集』が刊行

された。B5版。布製。箱入り。一、〇五二頁の巨冊。

ときに、横になって本を読むときの枕代わりにさせてもらった。「そうしてゆっくり読んだらよい」と、大野さんの幽かな声がして、耳がくすぐったくなった。

遮莫。汎社会、政治経済、自然、人間風景を視せてくれるえがたい書物。大野武夫さんは生きている。

「知ることには限界があるが、考えることにはきりが無い」「遊びを学問にまで高めよ」(「わが箴言」)

昭和四十三、四年(一九六八、九)頃ではないかとおもう。高知県婦人相談員の川口光子さんが、お城の下で大野武夫さんとぼつたり会った。

「これから、おうち祭り」をやるがこんかね」と、声をかけられた。「わたしは公民館で、(働く婦人の集会)があつて行けません」と返答すると、「そうか。リコモンが下で議論して、バカが上(高知公園すべり山)で祭りをやりよる」

川口さんは、立ち去る大野さんのうしろ姿を見て、なんともいえない恥ずかしさを感じたという。

「愚かな大賢と、賢い大愚を区

別するのはむずかしい」(「わが箴言」)

ある時期。という昭和四十二年(一九六七)から四十五年(一九七〇)にかけてである。大野武夫さんは、一週間に三、四回、私の事務室を訪ねてくれた。その日はいくらかくたびれた様子で、ソファに腰をかけた。ひと息入れてから、

「堀内さん。『書物は一代』というのがわたしの持論です。人間が死んでしまうと、その人が一生かかって学んだ蔵書は、歯抜けになつてしまふ実例が多いようです。私もいつ死ぬかわからないから、歯抜けにならないように、死に仕度をしていきます。一郎(武夫さんの長男)には、(おまえが要る本は残しておくから……)と言つて、あとはぜんぶ高知市民図書館と中村市立図書館へ寄託しています。さきよりは普段より余分に持つてきたから、ちよつと疲れた……」

と言つたのは、たしか大野さんが亡くなる前年であつたと思う。現在、高知市民図書館に収蔵されている『大野文庫』には、交通史。農政史。金融史。東西の文学書。伝記など一、四一〇冊ある。精読家の大野武夫さんの遺産に触

手をのばして、(精神の屈伸運動)に励んでいたのだと、望むや切なり。

「狙(ぞう)は煎り豆をかんで古人を罵倒した。われわれはサントリーのさかなに今人をそしる」(「わが箴言」)

また、ある年の夏ごろ。高知市民図書館の調査室で、大野武夫さんはこんなことを言った。

「——米屋や酒屋に借金を残して死んだらミトモナイが、本屋の

借金はほめられてもクササれることではない」と。

私は大野さんに訊いた。(下司の根性まる出しで)

「いま中屋さん(名は辰子。元の富士書房店主)とこの本代は、どれくらい溜まっていますか?」

「さあ、どればあやろう。まあ五万か、七、八万円くらいありやせんろうか」と、あつさり答えてくれた。

大野武夫さんが死亡して、数十日経って追悼集会が催された。あ

とで中屋さんが話してくれた。

「大野先生が、市民病院で最後のころに、冗談めかして、『いま残っている本代は、面倒をかけてすまないが、筆山の野家の墓地まで取りにきてや』と、真顔でいわれました。ですが亡くなる前には、私のほうから催促しないのに、キレイに支払つてくれました。本当にご立派な方でした」

中屋さんの目尻にみだが滲んでいた。

「度胸の半分は焼糞が引き受け

る」  
「立てば借銭すわれば家賃歩く姿は質通い」(「わが箴言」)

本稿の第一回で書いたが、大野武夫さんから借りた『銅像建設記念 坂本龍馬先生号』に言及すると、何回か返本しようとしたが、そのたびに、「いいから、いいから」と突っ返された。

大野さんが亡くなる前日。つまり、昭和四十六年(一九七二)七月二十三日の午後三時ごろ。私は高知市民病院

の四階個室に見舞った。

ドアをあけると、西枕に寝ていた大野さんが、弱よわしげに合掌して迎えてくれた。

会話をかわすことは不可能な状態だった。私は大野さんの左手を両掌で握つたままだった。そのうちふと気がついて、提げてきた『銅像建設記念坂本龍馬先生号』をそつと胸もとに置くと、どこにそんな余力が残っていたのか、といぶかしく思えるほどの力でずり下げると、かるく二度ほどどうなずいた。(いいよ。あなたに上げるから……)と、言ってくれているようだった。

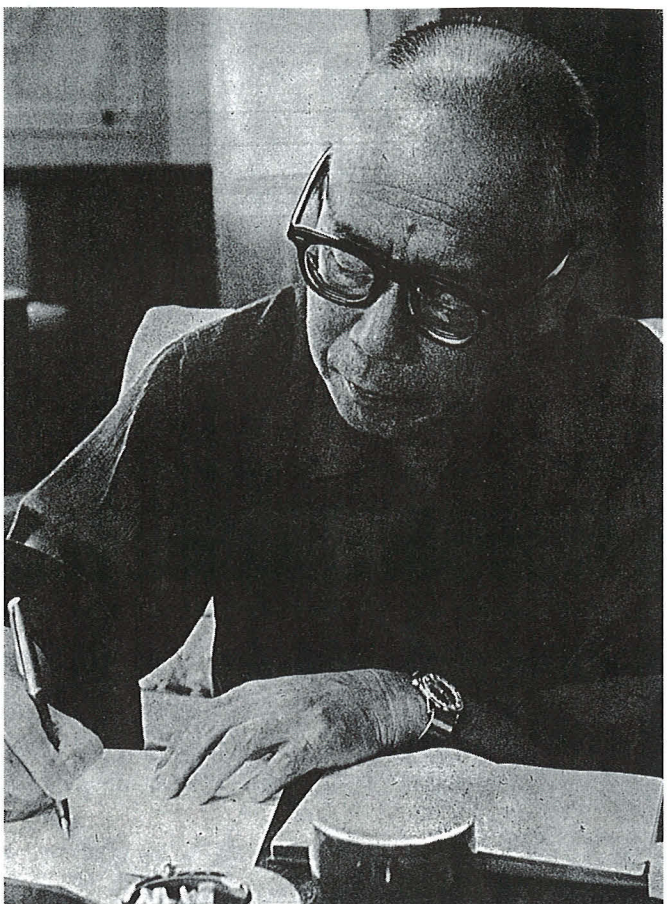
沈黙の刻がながれた。三十分ほどして、私はしずかに大野さんのベッドから離れた。

ドアの前に立ち止まってあとを振り向くと、大野さんは右手を挙げてゆっくり左右に振っていた。大土佐の野人、大野武夫さんは昭和四十六年七月二十四日未明に没した。七十三歳。

「壮烈に死ぬることはできそうだが。従容として死ぬることはむずかしいだろう」

「彼は人生に敗北したのぢやない。戦いつくしたのだ」(「わが箴言」)

(ほりうちゆたか・雑文家)



晩年の大野武夫



# お稲荷様界限

久武 盛真

お遍路さんはお金を持たずに家を出て、道中のご報謝を路銀に当てました。病気をしたり雨に祟られたら路銀に足りません。薪代で泊める木賃宿にさえ拒まれた人がお宮の櫓の下に来ます。ですが仏門の徒に火事でも起こされては困るから、見つけ次第出て行って貰う定めでした。薄闇に人影を見て母に知らせました。怪しい二人連れは癩患者でした。膿の出そうな首筋をひっ捉えてひきずり出す人は居ないと高を括った二人は居座り続けました。うんこは何処ですのかと気になって、釣瓶に触るのを苦にした数週間でした。

そんな新地の金波楼の小萩姐さんがうらぶれ姿で小雨の境内で跣の裾を乱してお百度を踏んでいました。悪い病気になったのでしょうか、身内に不幸があるのでしょうか。願ひ事は何だか知らないが果たして願ひは叶うだろうかと人ごと乍ら気になつて、私は神様の正体を確かめに本殿に侵入しました。父が警蹕の声を発して開閉する扉を無造作に開けると、まんじゅう大の小石と緑青の吹いた鏡がありました。これだと思つて鏡を持ち出しました。鏡は小萩さんには見せませんでした。遊び仲間の鹿三郎と熊喜と三人の共有の宝物にして、社殿と通夜堂の間に掘

った人が入れる程の罅壺に隠しました。この穴掘りで境内は底の底まで川砂だと判つて、雀が沢山落ちたあの嵐の晩にサイカチの太木が倒れた訳が判りました。その後隣町の悪ガキ共を相手にケストナーの「エミールと探偵たち」もどきの争奪戦の末に、遂に鏡を奪われた時は悔しがるだけで心は痛みませんでした。今となれば高祖父が大真面目でお祭りをした鏡を失った不孝は心の痛みです。もはや鏡の行方は調べようがありません。この経緯を知っていたのは兄だけでしたが、兄は敗戦の年の五月に死にました。

金波楼の健二と共栄楼の久子は同級生でした。新地の裏には汽水の池があつて鱈もいれば鮎もいて、お化けの住む万堂様の榎の暗がりでお海老が入れ食いで釣れました。そこへ行く暇から開け放つた金波楼の座敷が見えます。皆息を呑みました。ひる日中絡み合っている男女の姿が丸見えです。鹿三郎が大声で「やりゆうかや」と怒鳴ると「なんじゃ子供の癖に」とこちらを睨んだのは第二回目に常盤湯で見かけたあの俱利伽羅紋々のお兄さんでした。思えば彼はつきり秘事が露見したと早合点したのでしょうか。金波楼へは度々遊びに行つて、健二と二人で

お姐さん達にドキドキするような絵でたっぷり性教育をされて、人間も犬みたいに引つ張り合いをするのかと思うと恐ろしくなりました。

八月二日の夏祭りの前はお札やお守り造りで我が家はてんでこ舞いです。木版に墨を付けて刷るのは父で、文字に重ねて火の玉の冥利星を朱肉でベタリと捺すのは糸叔母さんです。竹の串に細い紙を巻くのは子供二人でした。

銀杏と榎の木の間に花台が出来ます。緑町のドブ沿いには絵金もどきの絵馬行灯。若松町の川岸にはオウチの並木の間に芝居の名場面のパノラマが展示されました。丸干しウルメの干し場になつていた川向こうの中島の草原では、仕掛け花火が準備されます。

花台や絵馬やパノラマや花火は誰がどのような思惑で奉納したのでしよう、おそらく顔役の旦那衆が奉賀帳を然るべき筋へ回すのでしようが、一切ボランティアで慰労の宴会も滞りなく会計はチャンと黒字にして、父へ費用の請求にはこなかったようです。

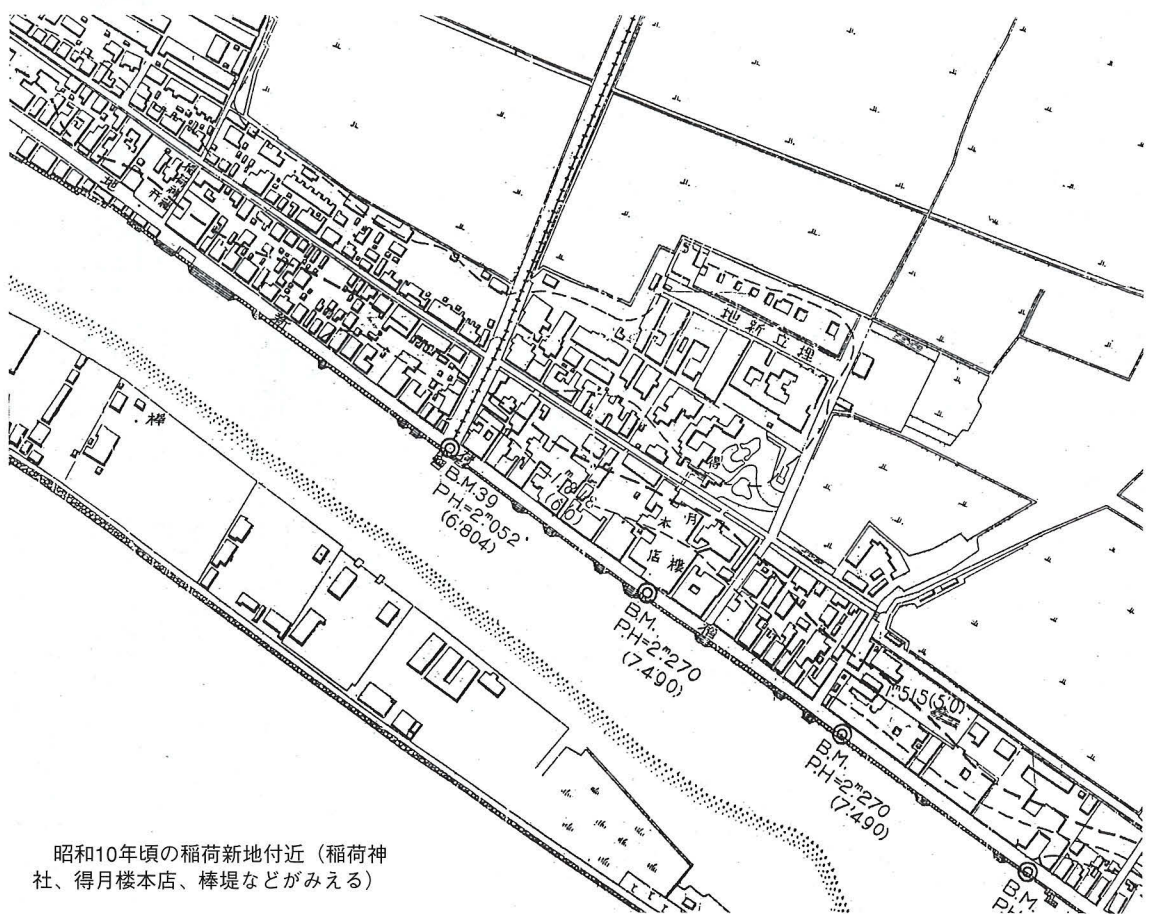
常盤町の交番からお鳥居まで、道の両側にアセチレンの露店がケバケバしくがらくたを並べます。境内では覗きカラクリと山亀の菓子屋が店

を出しました。山亀は緑町だから優遇されるのか毎年境内に店を出しました。

山亀の次男の清一がきな粉をまぶした浪速餅を、裁縫用の鋏で少々チヨキチヨキ切っている様子なので、「二辺やつたらか」と助け船を出すと二べもなく断られました。

ポランティアは受け入れ側の応対が難しいのです。つい先程関西大震災で外国のポランティアを外務省の役人が「頼みはしないが妨害もしません」とあしらつた話をテレビが報道しましたねえ。こんなのを二べもしやしやりもないと言うそうです。清一がもつと素直ならペンキ塗りを友達にやらせたトム・ソーヤーみたいに得をしたのに残念です。

お祭りにはお小遣いを倍呉れます。それでも子供達は屑鉄拾いをしました。日本人が何でも川へ捨てたがる事は第一回でもちよつと触れました。千底の川は室の山です。特に鉄工所の裏は無尽蔵です。子供達は苧坂古鉄店で換金して山分けにしました。苧坂は教育者ではないから品物の出所も親の承諾も不問で親の倍もお金を呉れました。大



昭和10年頃の稲荷新地付近（稲荷神社、得月楼本店、棒堤などがみえる）

勢なら疚しさを感じません。今の大人達も偉い人ほど満場一致ならば変な決議にも目をつむります。

昔のご神幸は鳥居前から船で行つたそうです。何処へ上陸したかは聞き漏らしました。法被、鉢巻き、足袋跳の子供が紅白の曳き綱で曳く太鼓台が「チヨウサヨ」と黄色い声で出発します。撥を持った子供が二人踊るような格好で練習の成果を披露しました。後から神輿が続きます。病気の父は供奉出来ずに応援の神主が幸領しました。道々酒と供物が献ぜられます。やがて千鳥足の神輿が還幸してくると、常盤酒林の前で押せども引けども動かなくなり、神主がどうにかなやしつけて常盤酒林から赤いツノ樽が献ぜられると、神輿は俄然正気に返つて人垣をかき分け押し分け一気に鳥居を駆け抜け参道を突っ走つてえらい馬力で拜殿へと殺到しました。

父は間もなく死んだのでこれが最後の夏祭りになりました。棺は憚つて背戸から出ました。翌日大阪の嘉二郎叔父が骨あげをして大方残しました。こんなに捨てる位なら海に沈めても風に飛ばしても構わないではないかと思いましたが。元来納骨堂も気に入りませんがそれは又の機会に譲りましょう。

(ひさたけせいま・泉文芸主宰)

# 土佐考古通信 (4)

山本 哲也

## 高知の土器

暮らしのなかで、茶わん・皿・鉢などの容器類は最も身近な生活必需品の一部。さまざまな形態や種類があり、材質も豊富ですが、陶磁器類の数に比べて食器の仲間から「素焼きの焼き物」が以外に少ないことに気づきます。

歴史のなかで、実はこの素焼きの焼き物が主要な食器類等として永らく製作・使用されてきました。大陸から登り窯を用いて高温で土器等を製作する技術が伝わるまで、土器は「野焼き」により焼成された素焼の品が一般的でした。私達の祖先にとってかわりが随分深かったわけで、遺跡から出土する土器の大半を占めています。

土器類は、時代や時期等によって形態・成形技法等に変遷がみられることから、時期判別に有効な基準資

料として分析・活用されています。そこで、県下出土の土器類について、縄文・弥生時代を中心に概要にふれてみたいと思います。

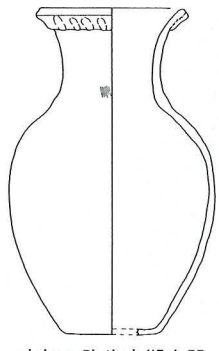
高知県は、縄文（縄紋）時代草創期（約一万年頃）から土器が使われ始めていたことが確認されています。十和村・十川（としか）馬場（ばば）崎（さき）遺跡、南国市・奥谷南遺跡、佐川町不動ヶ岩屋遺跡などからはこの時期の隆起線文土器等が出土しています。定住生活が始まった縄文時代では集落の形成とともにその地域特有の縄文文化が開花することになります。縄文土器の発達も生活様式の変遷と密接な関係を持っていたと推察されます。

縄文時代の名称は、縄文を持った土器を使っていた時代であることに由来しています。縄紐（なまひも）や貝殻などによって施された土器は、縄文前期から中期にかけて土器の種類が増加し、さらに後期になると縄文地の一

部をすり消して文様とする「磨消縄文土器」が盛行します。宿毛式土器や松ノ木式土器などの県下の縄文土器もこの時期に該当します。縄文後期にもなると各地域によってバラエティーに富む土器が製作されています。

本山町の松ノ木遺跡から発見された「松ノ木式土器」は、土佐の山間部の縄文土器ですが、瀬戸内中部と西部地方の要素が混合し、宿毛市宿毛貝塚を標式とする「宿毛式土器」の影響も受けていることが明らかになっています。この土器群は鹿児島県山中（やまのなか）遺跡からも発見されており、土器の分布範囲や交易圏の広範さに驚かされます。このように、同じ土器の遠隔地での出土例は、背後にある人の移動や交流の存在を物語ってくれます。

稲作農耕が波及した弥生時代では新たに壺・甕（かめ）・高杯（たかねがし）が登場



高知の弥生中期土器 (粘土帯貼付口縁)

し土器類の器種構成の内容が変化します。弥生前期末〜中期には土器のもつ地域色も濃厚となり「土佐型」と認定される高知県版の独自の土器も現れます。煮炊きに使用する甕のなかに「土佐型甕」とされる型式の土器があつたり、他の地域ではみられない「粘土帯貼付口縁」と呼ばれる土器製作技法が認められたりしてローカル色豊かな展開をみせます。

また、装飾を施した壺や高杯の文様の一部には、他県の資料にはあまり例のない土佐応用版の変形文様があつたりします。総体的に、高知の弥生土器は県外資料と比較して少し粗雑で雄々しい感じを受けます。このため、県外からの搬入資料があると容易に選別することが可能な場合があります。

こうした「土佐の自由な弥生土器」は、一面で型にとらわれない土佐弥生人のおおらかさを反映しているものと解釈することもできます。「こればあでえいろう。使えたらえいき。」なんて話ながら土器を製作していたとすれば、想像するだけで楽しいものがあります。土佐人気質ははるか弥生時代にさかのぼり、土器に表現されているのかもしれない。

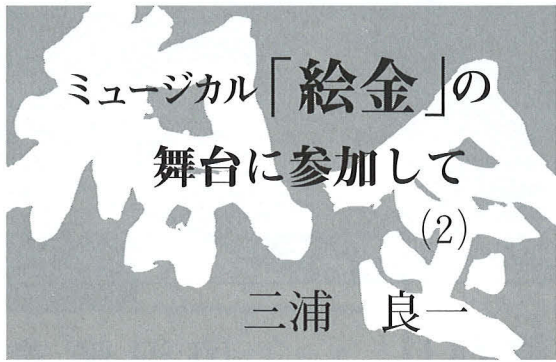
（やまもとてつや・高知県埋蔵文化財センター）

◇自我をすて、無心に反応する事がダンスの出発点でした。それは期間中、演出の帆足先生から「臭い芝居をするな」と再三注意された事にも通じるものでした。それにしても、専門家というものの存在感には目を見張りました。特に、日常的に指導を頂いた先生方の迫力は、強烈でした。

歌唱指導の川田先生の声は、論より証拠そのもので、いつも広い会場を爽やかに突き抜けておりました。ダンスはスガジャズダンススタジオ主宰の須賀先生、これがプロというものかという感じ、その場で生まれる振り付けが、巧みに決まってゆくのは驚きでした。

普段はインストラクター三名の方がレッスンに臨まれたのですが、この厳しさも、素人には初体験の容赦のないものでした。時には「やる気の無い者は今すぐ辞めて帰れ」などと怒鳴られました。みんな黙って付いて行ったのは、レッスン生以上に、汗びっしょりという姿を目の当たりにしていたからでした。

演技訓練の基礎としては、早口言葉や発声、パントマイム等が取り上げられました。演出は帆足寿



夫氏が担当されました。県内演劇界では、劇団ゆまにての(仮)武市哲夫さんと並び第一人者と言われていた人でした。舞台以外で直にお目にかかるのは初めての事でした。タバコの好きな、白髪の良く似合う優しい人、というのが第一印象

象でした。ところがそれは、いかにプロの実態を知らないかという素人の甘さでした。

片時もタバコを離さない氏の姿は、いつも緊張を強いられている演出者の厳しさを物語るもので、その言動は峻烈そのもの、みんな

ビリビリの連続でした。先生の満面に笑みが浮かんだ表情に接したのは、無事公演が終わってからの事でした。

は、手渡されていた台詞の一節を読み上げるといふもの、情感たっぷりにやりましたが、失敗でした。肝心なことは、よく通る大きな声だったのです。好きな歌という項目では、屋台で歌う「焼酎の歌」なる替え歌を怒鳴りました。駄目でもともと、これ以上は周りに迷惑を掛けるといふ気持ちもありました。ちょうど一緒だった年配の男性で「紀元節の歌」を歌った人がおり、その奇妙な対比に審査員席からは失笑が洩れていました。最後は個人的な質問でした。やはり年齢の事が話題になりました。体力の問題もさることながら、年不相応なその心情に興味をそそられたのでしよう。

「ここまで来たのだ、オーディションというものも覗いてみたい」という不埒な思いの私もそこに入っておりました。問題は三項目、課題ダンスと台詞読み、そして愛唱歌の独唱というものでした。会場へ着くと、みんな紅潮した顔付きで、ダンスのステップを踏んだりしていました。久し振りに、寸前まで辞書をひく嫌な受験生に出会った感じで苦笑いをしたり苛々したり。

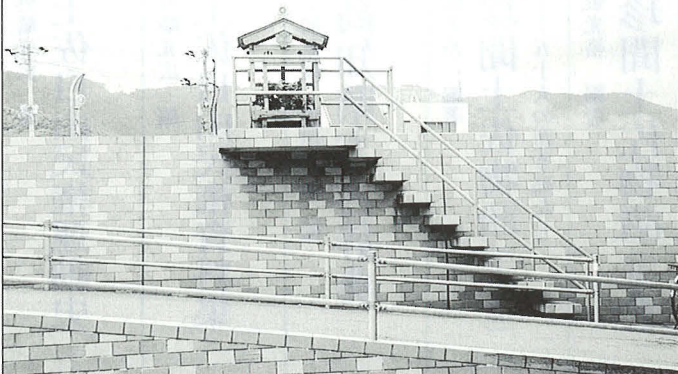
「はあ、今日も出掛けに家内に言われました。貴方は少し変じゃない...と」、私が半ば投げやりなことに、間発を入れず「そう変です」と領きながら応じる審査員がおいでたのです。ちょっと間を置いて、その人は言われました。

やがて六人ほどのグループごとに試験場に入り、ずらりと並んだ十人程の審査員の前で、一人ずつ発表という事になりました。ダンスは無我夢中でした。事前にビデオを手に入れ、振りを身に付けようと懸命に練習した結果、ふくらはぎに筋肉痛を起こし、サロンパスを張っての登場でした。本読み

「少し変わっていないと、こんなことは出来ませんよ、私もそうなんです」

（つづく）

## 散歩の途中で



比島橋が高い位置に架け替わり、元の橋のたもとにあった祠が居り場所にめぐねてこのようなことになった。  
祠のそもそもの由縁を知らない。何代か前の橋造りの際の水難か、洪水時のそれかも知れない。  
石段ならぬタイル段を踏んでお参りするわけだが、手すりをふくめ、ひと工夫ないものかという気がする。  
それはさておき、この日も真新しい菊が供えられていた。

## 風伯

### せんだん賛歌

カミサンたちがせんだんの枝にイワシを干して「つるめ」にした。田舎では、漬物用の大根を吊して沢庵にしたものだ。  
夏は、暑気を避けて葉陰の下で、商いのオンチャンが鉛湯、綿菓子、駄菓子を買っていた。子どもはせんだんの幹のまわりで独楽を回したり、蝉をとったり、面子を打

高知市を代表する木が「せんだん」に決まって快哉を叫んだ。これでやっとせんだんも市民権を獲得した。元もとせんだんは、スギやヒノキと違って実用的価値は乏しい。しかし庶民生活に潤いをもたらしてくれたことは、たしかな事実だ。  
戦前、戦中——沿岸地方では、漁師のオ

って遊んだ。それで大人になると、童心をいざなう郷愁の木として、せんだんに愛着を感じたものだ。  
しかし敗戦いろいろ、せんだんはだいに影をひそめるようになった。南海大地震や暴風雨で倒伏し、道路整備や用地改修などで伐採され、交通障害（せんだんの落ちた実で車がスリップを起こすといつて）を理由に除去された。じつは先日。知人の見舞いで医大病院へ行く途中、一宮街道で数本のせんだんの木を見た。  
——昭和初年。来高した詩人、富田碎花が、一宮街道のせんだんの花を眺めて感激し、即興歌を詠んだ。「ごしがる北山越えて来し国の、並木の花はせんだんの花」  
せつかく高知市を代表する木になったのだから、せんだん並木をどこかに復活したい。  
(梅吉)

## 市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備  
所在地 高知市はりまや町一―五―一  
デンテツターミナルビル5F  
お申し込み  
(助)高知市文化振興事業団  
73―4365

## 清流を子らへ

——21世紀に残したい鏡川——

高知河川環境研究会編  
A5判・並製本122頁・本体価格1,000円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

## 高知の高齢者と保健福祉

井本正人・真田順子・藤岡純一 編  
A5判・並製本112頁・本体価格1,000円

高知県内における高齢者の保健福祉について、実態とニーズを調査し、具体的な政策提言を行う。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

## 賛助会員募集中!!

会費 年額 2,000円  
特典 ① 機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。  
② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)  
③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)  
〔※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効〕  
お申し込み ①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…  
いずれの方法でもけっこうです。



第13回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

## 高知を撮る

### かじ 楮むし

### 義隆 沢国

「騒じょうじょ」、「めい福」のように漢語の表意性を半殺しにする似非漢語を日頃苦痛しく思っている、とも述べておいた。  
私が「ルビ」と題するあのコラムを書いた翌月、白川静博士の『辞通』が刊行された。八十六歳の博士が、『辞通』に『辞統』に続いて、十二年余の歳月をか

## ルビ 再説

振り仮名

### 風俗歳時記



によって漢字の意味が衰退していくことを防ぎ、漢字に本来の意味を蘇らせようという意図も込められている。由、折しも、国語審議会も、いわゆる交ぜ書きの弊害を指摘し、必要に応じて漢字を用いるよう提言している。  
(朴)

NHKの「週刊ブック・レビュー」(衛星第2)を覗いたら、妹尾河童氏が登場した。  
最近上梓して、たちまちベスト・テン入りを果たした、小説『少年H』について、インタビューに答える「特集コーナー」。  
この小説の一つの特徴は、漢字をなるべく開かないで、総ルビを付したことであり、と言っている。昨今の若者が読んでも、すらすら読めて、難しい漢字も覚えられるように、自分が少年の頃読んだ書物のスタイルに倣った、と語っていた。  
私も、本誌73号(一九九六年九月)で、谷沢永一氏の「人間通」から例を引いて、ルビの効用を説いたことがある。また、その際、「騒じょうじょ」、「めい福」のように漢語の表意性を半殺しにする似非漢語を日頃苦痛しく思っている、とも述べておいた。  
私が「ルビ」と題するあのコラムを書いた翌月、白川静博士の『辞通』が刊行された。八十六歳の博士が、『辞通』に『辞統』に続いて、十二年余の歳月をか

け、しかも、単独執筆・編集した大著である。  
この辞典のPR用リーフレットの中で、博士の考え方の一端を現わす文章に出会った。  
「いまのわが国の国語政策では、われわれは「思ふ」こと以外には「念ふ」ことも「想ふ」ことも「憶ふ」ことも、みな制限されている。しかも念願、想像、懐古、追憶することは許されていないのである。しかしすでに訓読みを失ったこれらの字を、学習者はどのように理解することができるか」というのである。「漢字古訓抄」。  
出版社の宣伝文によると、「今回、用例文の訓読みに努めたものも〈補てん〉や〈麻ひ〉といった書き方の横行



外崎光広 著  
土佐自由民権運動史

著者の四十年に及ぶ研究を集大成。新資料による知見も盛り込みながら、土佐自由民権運動の全容を通史として明らかにした。  
A5判・上製本・四三四頁 本体価格二七一九円

外崎光広 編

土佐自由民権資料集

土佐自由民権に関する基本的資料百十数点を事件別に分類・収録。原資料によつて各々の事件の実態が把握できるようにした。  
A5判・三四四頁 本体価格一、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義 編

高知県方言辞典

古語から現代語にいたる土佐言葉一万四、七〇〇余の意味、用例、使用地点等を明示、注釈も加えた土佐方言唯一最大の辞書  
A5判・上製本・七三六頁 本体価格六、〇〇〇円

依光裕 編著

珍聞土佐物語(上巻)

五十人の語り部たち

土佐の山や海辺の村の囲炉裏端で古老が語つた地元の伝説や小咄の数々。ここでは地域別に二十名の語り部の百三十話を収録。  
四六判・三九二頁 本体価格一、五五三円

依光裕 編著

珍聞土佐物語(下巻)

五十人の語り部たち

県下各地の様々な語り部三十一名から寄せられた百二十話を採録。親から子へ、孫へ語り継ぎたい「ふるさと」がここにある。  
四六判・四〇八頁 本体価格一、五五三円

岡林清水 著

高知県文学散歩

高知県の文学を地域に即して紹介、その舞台、歴史、作家の足跡等を訪ねて歩く。旅のなかの文学史」ともいえる文学案内。  
四六判・二七八頁 本体価格一、七四八円

山本大 著

幕末の青春

坂本龍馬の生涯

激動の幕末期を駆け抜けた坂本龍馬の一生を、史実に基づき分かりやすく描いた、子供から大人まで親しめる屈指の龍馬伝。  
四六判・一六八頁 本体価格一、一六五円

藤本稔子 著

思いつきりみとめて  
子育て

子育て 個育て 親育ち

保育者としての長い経験からみた子どもたちのいきいきとした姿。その豊かに育つていく過程を描きながら子育てを考える。  
四六判・三三二頁 本体価格一、五五三円

高知市文化振興事業団 編  
わがまち百景

21世紀に伝えたい高知市の風景

高知市の誇りとして残したい風景を百力所選定し、百人の随想と写真で紹介。様々な視点からの素晴らしい高知が実感できる。  
A5変型判・三四頁 本体価格一、一六五円

高知市文化振興事業団 編

高知のエスプリ

ふるさとの未来を考える

県内のオビニオン・リーガー五十人が、各々高知へのあつい思いを語る。「文化高知」巻頭文からカットとともに収録した。  
A5判・一六〇頁 本体価格一、一六五円

高知の文化を考える会 編

高知の文化を考える

文化について多方面から検討、豊かで個性的な市民主体の高知の文化をどうつくり発展させていくかを、市民的立場で考える。  
A5判・一八八頁 本体価格一、一六五円

清水孝之 著

中山高陽

土佐の生んだ江戸文人画の祖中山高陽の業績を明らかにした労作。資料として未発表のものを含む書簡集・年譜等を収録した。  
A5判・上製本・三三六頁 本体価格三八〇〇円

筒井広道 著

画帳の歲月

高知画壇の重鎮の、美と画業についての随想集。県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。  
A5変型判・上製本・二五六頁 本体価格一、九四二円

高木啓夫 著

土佐の芸能

高知県の民俗芸能

現存する土佐の民俗芸能をくまなく収集し体系化。それぞれを神楽・獅子舞・地芝居・太鼓踊り・民謡等に分類し、詳説した。  
B5変型判・上製本・三四六頁 本体価格四、八〇〇円

土居重俊 監修

高知市文化振興事業団 編  
土佐弁 土佐日記

紀貫之の名著「土佐日記」を、現代とさことばでつづる。古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。  
B6判・上製本・二一〇頁 本体価格九七二円

高知県緑の環境会議 森林研究会 編

高知の森林

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、残されている貴重な自然や植生、森林と人々とのかわりりの歴史、現地への道のり等を紹介。  
B5変形・二二八頁 本体価格二、四二七円